

いま 8. 私たちの現在を問う ～女性の活躍とは～

静岡女性史研究会
代表 大塚 佐枝美

1. 事業目的

現在、政府は女性の活躍を施策としている。女性の置かれた状況を歴史的に遡って検証したいと考えてこれらの講座を計画した。明治時代の良妻賢母教育、戦後の男女平等の新憲法、1970年代に始まったウーマン・リブ運動、そして国際婦人年は、戦後の女性たちの生き方、制度に大きく影響をあたえてきたように思う。女の視点で歴史を見直し、今なぜ女性の活躍が問題とされているのか？男女共同参画が叫ばれるようになって久しいが、何が実現され、何が問題であるのかを探る一助としたい。

2. 事業内容

講演会

「私たちの現在(いま)を問う」

【第1回】

講師：居城 舜子

「賃金のジェンダー平等を求めて一同一
価値労働同一賃金原則の変遷と課題」

実施日時：平成29年10月28日(土)

10:20～12:10

(あざれあメッセ・第12回静岡県女性史交流の
つどい)

実施会場：あざれあ 第2会議室

参加人数：21名



内容：

本講座のメインテーマである同一価値労働同一賃金、すなわち男女平等賃金の話題に入る前に、講座の冒頭では、全国的な統計からみえる静岡県の女性労働の実態を解説した。

厚生労働省「平成28年働く女性の実情」・内閣府男女共同参画局・国勢調査等の全国統計によると、女性管理職数は、統計によって異なるが、全国47都道府県中、静岡県は47位もしくは46位に位置付く。静岡県の女性の労働力率は、全国13～15位に位置付くが、出産退職が多く、復帰する女性が少なく、M字型カーブのMの底が深い県であることが、この背景にあると言える。さらに、専業主婦率が高いのが、神奈川県と奈良県であるが、静岡県の女性の正社

員比率は、奈良県よりも低く、静岡県の20代後半の女性の正社員率が全国最下位である。静岡県の男性の給料は、全国1位や2位を取るほど、高くないにもかかわらず。20代後半の正社員の女性の仕事が少なく、出産退職すれば、40代になっても女性の正社員比率が低い。日本の場合、正社員での継続就労を経て、管理職予備軍になったのちに、管理職になるので、静岡県では、女性の管理職の予備軍がとても少ないということになる。また、「女性が仕事を持ってずっと働き続けたほうがいい」と考える男性割合は、静岡県は45位に位置する。こうした実態を踏まえると、女性全体の底上げと男性の意識改革が課題となってくる。

ここに、賃金構造が関係してくる。ヨーロッパでは、賃金構造の上下の差が大きいと、男女の賃金格差が大きくなるといわれている。逆に、賃金構造の底が上がり、上がそれほど高くなると、男女の賃金格差は少なくなる。現在、ヨーロッパやILOでは、賃金格差の是正を目指すことが謳われ始めている。日本の男女の賃金は、男性100に対し、女性は73から75といわれている。パート労働者等の短時間労働者を含むと、男性100に対し、女性は45ともいわれるが、政府の資料では、短時間労働者も含めた試算は出てこない。日本の男女格差は、先進国の中では大きい。男女間の賃金格差は、男女平等、あるいは男女共同参画の度合いを示すひとつの尺度になるのである。

この講座はウーマン・リブ以降の日本の女性史を振り返ることがテーマになっているが、アメリカでは、ウーマン・リブ運動のひとつに、男女の賃金格差の問題が位置付いてきた。一方、日本においてはそうではなかった。これが日本の特徴である。欧米では、1850～1860年代の第1波フェミニズム運動といわれる女性参政権運動の主張者の中から男女平等賃金が登場し、最も早くイギリスで、その後アメリカで発展するが、日本は1970年代後半からクロー

ズアップされてくる。三重県津市役所の女性公務員や秋田相互銀行の行員が、男女別建て賃金に対して、裁判を起こしたことがきっかけになった。静岡でも、静岡銀行や浜松の第一勧銀、丸子警報器等の裁判がある。このように、日本の男女平等は裁判で勝ち取ってきた歴史がある。労働組合でもウーマン・リブ運動でもなく、裁判の判例が定着して、だんだんとそれが法律に反映されていくというかたちを取ってきた。

講師の居城氏は、1995年から森ます美氏とともに、賃金の男女間格差の是正主張する場合に、「同一労働同一賃金」では限界があるとの考えから、「同一価値労働同一賃金」を主張してきた。一方、最近、働き方改革の一連の法案の審議の中では、「同一労働同一賃金」が主張されている。ここでの政府の直接的な狙いは賃上げであり、非正規雇用の賃上げを念頭に置いているのである。欧米では、1970年代後半から80年代にM字型カーブが台形型に変わり、同時に男女平等賃金が発展してきた。日本は、いまだM字型カーブが続いている。居城氏は「長年言い続けてきたので、もう後輩の方に期待したいと思っている」と述べ講演を閉めた。

講演後の交流会では、かつて女性たちが産休後に働き続けるための共同保育所をやっていたが、それから、だいぶ社会が変わってはきていると思うけれども、中身は非常に乏しいのかなとは思ったりして聞いたという感想が出てきた。

【第2回】

講師：田中美津

「私を生きる、自由に生きる」

実施日時：平成29年11月15日（水）

13：30～15：30

実施会場：アイセル21 研修室

参加人数：31名



内容：

世の中はすごく生きづらかった。かけがえのない私であるはずなのに、このようにすれば好かれる、このようにすれば女として価値があるとされていた。ブラジャーがあれば貧弱な胸も少しはよく見えるとか、いい女と思われなくても私は私。そういうことを主張したのがリブだった。

未熟児で生まれ、小学校時代は駅の階段を上るのが息苦しかった。生まれつき蛋白尿が出つづけ、小さい甲状腺がんを持っていて、元非結核性抗酸菌症。副腎皮質ホルモンを長期服用している。

自分はかけがえのない自分であるということを人よりも早く気がついた。こんなことを強制されたら自分の人生がダメになる、自分を生きることができないで終わってしまうと27歳で運動に立ち上がった。1970年代、パソコンのない時代、手書きのビラを配布すると、女性たちが多く、集まってきた。一方アメリカでもウィメンズ、レボリューションの運動が起こったが、我々は独自の運動として始まった。

一方、私自身は面白そうなことに魅かれる人間だった。日本人であるとはどういうことか、を知りたいとの思いから、国際婦人年に、メキシコに行った。4年間の間に、未婚で子どもを産んで、3歳の子どもを連れて帰ってきた。母

親はすべてを受け入れ、親兄弟から一度として「未婚で、父なし子を産んだ」と言われたことはない。

日本では昭和23年ごろから、高度成長期を女の安い労働力で担わせるという隠れた意図があって経済的に中絶ができるようになった。経済条項をはずした方がいいのではないかと、という動きがあった。それに対して障害者団体である青い芝の会とともに反対運動をした。中絶は女性にとって当然な権利であって、中絶の自由というものとして、正義は我にありと思ったかということ、もう少し複雑で、産む産まないを男たちによって決められたくないという運動であつた。

たまたまの私は体が弱いために鍼灸師になり、34年になる、今では同い年の人より体が丈夫になった。いいことは悪いことにつながり、悪いことはいいことにつながり、人生様々である。かけがえのない私を支える体調、まずそれが第1である。いくらかけがえのない私であっても、早死にしてしまえば自由もへったくれない。

現在の関心事は沖縄の問題である。民族の違う沖縄にしてきたことは恥ずべきことで、日本の0.6%の土地の沖縄に米軍基地の70%を押し付けて、平気で9条守れと言っている。日米安保のもとで沖縄が米軍を一手に引き受けて、まもられている。憲法9条の裏で沖縄が苦しんでいることを知る必要がある。

トランプがくることに対して、強く反応しているのは、沖縄である。トランプは憲法9条があることを知っていて、首相に武器を買えと言っている。それに対して、なぜ日本人は怒らないんだろう。なぜこんなに鈍いんだろと思う。

世の中の制度を変えることと、私たちが幸せになることは、両輪である。

「人は幸せになるために生きている（戦うためでも子育てや仕事をするためでもなく）。

小さな生きものだから、小さな幸せに気づくことができる。いつでもどんなときにも見出すことができる小さな幸せ。そう、幸せになるなんて、とっても簡単。幸せはパワーの源泉です。これからも、沖縄のジジババの隣で「基地反対！」の座り込みを続けたい。戦争へと傾斜しつつある状況を全力でくい止めたい。誠心誠意の疲れる治療を続けていきたい。自分を好きになれない人の傍らで、辛抱強くその話を聞いてあげたい。死ぬまでワクワクすることが大好きな女でいたい。それだから、パワーレスにはなりたくない。それだから小さな幸せに気づいて喜んで、この今、「生きてるっていいなあ」と、日々思う幸せな私でありたいと願うのです」

【第3回】

講師：加納 実紀代

「私たちの現在を問う
—女性の活躍とは？—」

実施日時：平成29年12月4日（月）

13：30～15：30

実施会場：あざれあ 第1研修室

参加人数：31名



内容：

2018年、政府が「明治150年」事業を主催することに関して危機感を覚えたという加納氏。歴史家としての視点から明治以降の女性

の姿を見直すことで、この事業に潜む危険性を解説した。

氏は、この事業の中で、政府が「明治の精神」として「女性の活躍」を焦点化しているが、実際には明治民法等によりつくられた家制度が女性を抑圧したと指摘。また、海外出兵に明けくられた明治時代こそ、男は「兵士」としてお国のために戦い、女は「良妻賢母」としてお国のために戦う男を支えるというジェンダー秩序が確立された時代であり、学校教育によってもそうした性役割が刷り込まれたと主張した。

その後、第二次世界大戦で敗れるまでの間、日本は海外出兵を拡大させたが、特に満州事変以後は、国防婦人会が拡大・発展し、女性も「銃後の女」として戦争協力するに至った点を解説。氏がとった「女にとって、8・15は何であったか」というアンケート調査によると、「あの時負けたから私は生きている」「もし勝っていたら、軍国主義ははびこり…」等、負けてよかったという意見が多くみられたことを紹介。敗戦後、日本国憲法の成立により、ようやく男女平等条項が入れられたことは、当時の女性に感動を持って受け止められたとした。

しかし、今、日本は歴史の岐路に来ており、自民党の憲法改正草案はまさに立憲主義の破壊であると、氏は主張する。また、安倍首相の演説から「女性の活躍」は女性のためではなく「お国のため」という考えが透けて見えるとし、併せて、フランス「ル・モンド」紙では、安倍首相は歴史修正主義者とされていること等を紹介した。

これらのことから、政府主催「明治150年」は、①敗戦による〈戦後国家〉の終焉を無化②日本近代の歴史を、ひとつながりの明治の「富国強兵路線」によって上書き③「戦後」の終焉：憲法の平和主義・基本的人権・男女平等を破壊④「女性の活躍」に名を借りて国家への貢献を評価するような危険性をはらんでいると結論づけた。

講演後、参加者から「道德教育の中に人権教育を入れてしまう動きがある」「家庭教育支援という名で国家があるべき母親像、家庭像をつくり上げようとしている」「吉田町で夏休みを短縮することになった理由として、国策に基づくとの説明がされた」「文科省から男女共同参画学習課が消えて共生社会学習推進課になる案が出ているが、男女という言葉が消えることで、男女平等の動きが弱くなる」等、今後、国がどういう方向に向かうのかという不安が示された。氏からは、個人の尊重、自分や相手を尊重することが、今だからこそ必要であるとの言葉があった。

3. 事業の成果

★一番ショックだったのは管理職に従事する女性の静岡は47位という数字だった。その原因なるものを考えると①静岡の女性は保守的、性別役割を当たり前と考えている。そして②親の考えや、教育の場面において女子教育が保守的である。③男性の意識の中に専業主婦を望む人が多い。また、④ロールモデルが周りにいない。⑤事業所に恵まれず、収入に無頓着で、生活に困ったという女性が少ない。⑥性格が穏やかで、フロンティア精神が少ない等、いろいろ考えさせられた。有能な若い女性が東京へ出ていくことにもつながっているのではないだろうか。

★1919年ベルサイユ条約の第13編にあたる国際労働規約。ILOの設置を定め、1日8時間の労働、週休制、児童労働の禁止、男女の同一労働同一賃金などの労働に関する一般原則を定める。1946年、国際労働機関憲章に引き継がれた。世界では100年も前に同一価値労働同一賃金の原則が定められていたということを知った。

★私たちの現在にある課題は歴史をたどってみることにより、よく理解できる。社会の仕組みが改良されていないことの原因は女の論理が現実の社会では実現されていないことにある

のではないかと政策決定の分野への女性の進出が遅々として進まないことも関連してくる。明治の良妻賢母教育の根が深く、意識改革が実現するまでには年月がかかるということか。

4. 今後の展望

今回得られた情報をもとに、歴史を知ることの意義等、冊子や動画によって情報発信していくことにより政治を語りたがらない一般の市民に向かって歴史を通して現在の置かれている状況を知るといった意識を伝えていきたい。

5. 協働団体

- ・NPO法人 男女共同参画フォーラムしずおか
- ・きらり交流会議 女性史づくり
- ・みしま女性史サークル
- ・一般社団法人 大学女性協会静岡支部

6. その他（アンケート）

【感想】

【第1回：賃金の男女平等を求めて同一価値労働に同一賃金の原則と変遷 居城舜子氏】

★一般的にフェミニズムの運動、女性学、そして女性史のジャンルの中で女性労働についてほとんど勉強してこなかった事を改めて思った。こういった知識を高校生や就職前の女性たちに勉強して社会に出て行ってほしいと思う。1980年代から日本の女性運動は男女差別における意識改革がその中心であったが、20世紀以降、社会進出していった女性たちの問題は、現在の女性労働における男女差別の他に、女性史もテーマとすることで、女性の労働や社会運動についてウィングを拡げていったらどうだろう。

★ベルサイユ条約から100年の流れの中で女性の戦いがあったのだとつくづく思う。居城講師が「長い闘いを続けて疲れた。あとは後進に」との言葉に大変さとむなしさを感じるがこの永

き闘いの底には全てジェンダー・バイアスの社会通念が横たわっている。やはり、根本的な「男女共働社会の人権意識をしっかりと浸透していかなければならないと痛感した。

★女性の賃金が男女平等問題で、フェミニズムがそこに視点をおかなかつたという点、社会保障が男女平等に基づいてあること、育児、子ども教育の基本を知り納得した。

★女性の賃金が低く長く賃上げを要求してきました。なかなか難しかったです。歴史的におくれているのですねえ。

★地域の女性労働において静岡県的女性管理職が46, 47位と最下位の理由は、労働力はあるが出産して退職する人が多い事、正社員の仕事がない事（関西で男性の給料が高い順位1位の奈良より10位の静岡の方が低く最下位。本来なら給料が低いほど女性労働は増えるはず）、極めつけは女性に働き続けてほしい意識調査で男性45位、女性20位という結果も。

★日本の男女平等は困難をきわめて裁判で勝ち取ってきた、その判例が投影されている。浜松の第一勧銀や静岡銀など携わって活動してきた女性を掘り起こすのも女性史の仕事では？とのアドバイス。

★アメリカの女性労働活動家の活躍がILOのできるきっかけを作った。戦時中、男性の仕事を女性が担い同一労働同一賃金の考えが生まれストライキを抑えるため戦時内閣が決定したとは、日本の戦時中と比べると違いに驚いた。

★日本の最低賃金制度は非正規を主に女性が担ってきたために低い。これからは男女間の同一価値労働同一賃金にしていかななくては多様な働き方の不公平感をなくすことは難しい。

★長年専業主婦プラスパート労働してきましたが、改めて無知のために男女格差をあまり気にせず受け入れていた私たち年代（67歳）が日本型働き方を認めてしまっていたのだと知りました。

★同一の価値がある労働であるならば、同一の評価を受けるべき、という当然のことができていない現状を、改めて突きつけられた思いでした。

★この先、IT化により在宅勤務等、就業時間や就業態度では判断できない働き方が増えていくと、「労働の価値」をどう評価するかという点がますます重要になるのではないかと思います。その意味でも、「同一価値労働」が正当に評価される環境を、速やかに整えることが重要だと感じました。

★貴重なお話、ありがとうございました。1980年に一般職として就職。7年後に結婚・出産に伴い退職。うすうす感じていた社会の仕組みと流れを学問として体系だって提示して聞かせていただき、とても面白く、納得いたしました。学問としてその矛盾も歴史もよくわかっているだけに、遅々として変わらない実態にいらだつ思い、感じられました。静岡の男性の意識、それに従っている女性の意識、生れも育ちも静岡の私にはとても納得。では、どうしたら解決するのか。これからも考え続けていく事から始めたいと思いました。

★自分自身のライフヒストリーと重ねて考えました。私共の時代は再就職先に恵まれていませんでした。正規職の時代には非常勤のようなばかばかしい仕事なんてやってられないというのが正直な気持ちでしたが、働かなければと思いついた時には非常勤でした。学窓を出るときにはもっと確かな職業意識を習得しておくべきだと思いました。

【第2回：私を生きる、自由に生きる 田中美津氏】

★ご本人の生き様を想定し、もっと過激でバリバリの印象を持っていましたが、とても小柄で、自然体な感じがし、良い意味でイメージを裏切られました。社会が良くなるためには、まず自分を存分に生きることが前提でそれは両立でき

るといってお話に感銘受けました。

★74歳といっても元気で生き生きしていて、特に歌が良かったです。

★生きることに力づけられました。ありがとうございました。

★歌詞しか知らなかった生歌が聞けてうれしかったです。最近、「私はジェンダー平等を求めるけどピンクが好き、女の自立を目指すけど男性に頼りたくなることもある。だからバッドフェミニストと名乗る」と書いた本を読んで、田中美津さんのことを思い出しました。「かけがいのない私」と気付いてらしたことを。

★田中さんが現在感じていることを伺うことができ、良いお話を聞けたという充実感がありました。ご著書でもそうですが、田中さんの言葉は、心に留めておきたい印象的な言葉がいっぱいですね。

★声のトーンがほどよく快く全部のお話を聞けました。もちろんお話の内容も盛りだくさんで、とても良かったし、考えさせられました。体調と幸福の事などその通りだと思います。沖縄についての話も全く共感します。

★沖縄の話、ありのままのじぶんとかけがいのない自分が胸にしみました。沖縄についてはいつも心にあり私としてどう向き合えばいいのか考えてしまいます。

★私の年上の友だちが「私たちはリブだ！」といって話をすることが、とてもその人柄がすてきだったのでリブとは？知りたかった。リブのことがよくわかった。

★最後の連合赤軍の話はおもしろかったです。最初の方の話は変わらない美津さんらしいお話でほっとする内容でした。

★①自由とは一日24時間であること、1歳ずつ年をとる事。その中でI live freely 足もとにも及びませんが興味のあることに走る、好奇心の強かった子供の頃より変わらない今じかにお会いできてHAPPYでした。

②日々是好日、日々重ねての努力丁寧に生きていきたい私です。

③65歳以降子どもに伝えたいこと、孫に残したいものを生きている私の夢の一つは、義務教育、高等学校での修学旅行は広島、長崎、沖縄、無償での実現。

★ほんものの田中美津さんをこの目で見られる機会得られてよかった。体の話をもっと聞きたかったです。身体性と思想。

★参加者全体で作り上げていくという形が心地良かった。自分の探求心を大切に感性を大事に生きていくかっこ良さに拍手！見習わねば。

★とても心地よく聞くことができました。退職後の生活を楽しんでいることが、体調さえ良ければという思いあり、ぴったりでした。これで良いんだと思え良かった。

【第3回：私たちの現在を問う 加納美紀代氏】

★女性の歴史をめぐる、先生のお話をうかがい国が作り上げてきた平和が今現在危うくなっていることが、ひしひしと感じられました。嫌な感じですが、国民がそれを感じられなくなることが一番不安です。騙されない人を作る人権教育が重要だとおもいました。

★「道徳」の使われ方、運用の方法ですね。色々な場面で家庭教育のされてない子どもたちにも出会います。そこはどうすべきなのでしょう？安倍さんもよくないけど自立していない、できない人は？

★安倍首相は口先だけで心がこもっていないのに国民はだまされている。何故日本人はこの人の言葉をうのみにするのかいつも疑問に思っています。

★人権教育、歴史教育の大切さを改めて感じました。しかしながら、子供たちにどのような形でそれを伝えるのか、また、現在の20～30代の若者に認識してもらうのかもどかしさでいっぱいです。世間話や、立ち話という形では、なかなか、伝えられないので・・・。

★内容が濃密で、少しずつ読み、話を聞くにつれ一つ一つ歴史を振り返って背景や人間社会のあり方を考えさせられる。そんな講座だったと思います。政治は私たちの生活の中に確実に大きく影響してくることがらだと改めて思います。何でもすぐにわかって飲み込めなければそっぽを向きがちな風潮に抗って、複雑でもわからなくてもめんどろでも深く踏み込んで知ろうとする態度を持っていたいものだと思います。

★銃後史ノートで提起した問題を今日の安倍政権の危うさの現状につなげて下さったお話は自分たちがこれまで女性史で学んできた事がらとつながって感慨深いものがありました。

★今の日本の状況を思うと本当に心が重くなります。日々考えてしまいますが、一人一人がお互いに認め合いそこからお互いの違いや同じ方向性を話し合い未来に向けて進める様な国になってほしいです。今の日本は国のやり方に賛成しないと言ってもそれを聞こうとしない雰囲気あまりにも強すぎて、おそろしいです。加納先生がおっしゃたように一般の人参加出来る講座になるように努力すべきだと思います。もっと広めるために。

★久しぶりに加納さんのお話をお聞きしてブレない姿勢のお話に深く感銘を受けるとともに、明治返りを目指す安倍政権に対抗するために一市民として何が出来るのだろうかと考えました。

★私たちは知らず知らずのうちに危険な流れの中に巻き込まれているという現状に恐ろしさを感じた。静岡に住まわれている皆さんと話しをしたい。加納先生に続きを話していただきたい。

★日本が戦う国になっていくようで怖い。平和が良い。今は戦前のように大事な憲法を変えていくような政治を変えたい。なのにやっぱり人々は自民党に票を入れて改憲できるようになってしまう。どうしてか？気がついたときは手遅れなんて～。

★国の策に従ってしまうことのないように。有益な歴史を学んだと思う。やっぱり働いている若い女性たちと話し合うような会を持たないとだめかなとも思う。

★とても興味深いお話でした。司会の方のまとめも良かったです。ありがとうございました。

★国防婦人会で母親が白い割ぼう着を着て神社で竹やりをしているのをじっとみていた自分でした。母親の気持ちはどんなだったのかなと考えていました。幼いこどもの保育園にも日の丸、国歌が入ってきています。

★時機にかなったタイトルでした。主催者は加納さんが指摘されたように多様な人が参加しやすい日時を考慮に入れた計画が必要ですね。自分たちの内にあるジェンダーバイアスを乗り越えてほしいなと思います。

★思っていたよりずっとお元気で、休みなく講義され、驚いた。静かなやる気を感じさせる方でした。アンケートで「戦争に負けて良かった」との言葉があったのにおどろき。おかげで、民主主義の世の中になったが、今また、戦争のできる国になるのではないかとの危惧に同感。明治150年のうたい文句で国家主義が台頭する？との考え方があるとは目にうろこでした。アンテナをぴんと張っていかなくては!!と思います。

★明治150年を祝うことが、富国強兵への逆戻りになっていきそうで。歴史を学ぶことってとても大事だと思いました。とてもわかりやすかったです。願わくば治安維持法と弾圧のことも話してほしい。銃後の女性たちも知らないうちに、がんじがらめにされ、操られていたしくみを知ってこそ戦争に協力してしまった誤りをくりかえさないことにつながっていくのでは。